

スイス学校便り

高校の卒業試験と大学入学資格試験

を兼ねるMaturを経験して(2)

米川 恵子



さて、そのMatur試験ですが、筆記試験と口頭試験の2部に分けて実施されます。例えばラテン語の筆記試験ではprima vistaの文章(これまでの授業や教科書に出てこなかった初めて目にする文章)をドイツ語に訳します。昔の賢人の作品から抜粋された長文が1題出されるのですが、私たちの場合はキケロの文でした。ドイツ語の試験では与えられた4つのテーマから1つを選び、作文を書きます。日本の高校では、国語力を育て文章表現をみがくという作文教育がどの程度実施されているのか知りませんが、こちらでは生徒にたくさんの書物と取り組ませる読書教育(とりわけ有名な古典作品を扱うことが多い)と共に、大きな2本柱として、作文には大変重きが置かれています。そしてこの2つの勉強を通してだんだんと、より広い視野で自主的に考え、自己を表現する能力が身につくように思います。

先生の指導によって、入学当初は幼稚な見方や表現しかできなかった生徒も、いつの間にか見かえるほどの論理的思考を身につけ、豊かな語彙を駆使して広い発想を展開していくことができるようにまで成長していることには、びっくりしてしまいます。今振り返って考えると私たちのドイツ語の先生(つまり「国語」の先生)はたくさん「読ませる」、たくさん「書かせる」うちに巧みに教え子の資質を引き出し、人格の発展を手助けして下さったと思うのです。そしてこの筆記試験はギムナジウム生活最後の総決算の作文になるわけですから、どの生徒も自分が今まで培ってきた力を作文中にフルに注ぎ込む努力をしました。

さて一方フランス語では出題された文章を読んでそれを要約、解釈、それについて的小論文を書くことが要求されました。答えはすべてフランス語で書きます。数学も地理も出題範囲は過去に習ったものすべてでした。上記のどの教科も試験時間は4時間もあったので1つを終えると、皆、くたくたでした。

筆記試験がすむと、今度はそれと同等の重みで評価される口頭試験が行われます。ギムナジウムでは普段の授業でも発言や発表に大変重み

を置かれることは以前にも述べましたが、1教科につき15分間のこの口頭試験は、私たち生徒にとって筆記試験よりももっとこわいものでした。複数の試験官(その中には評価の公平を期するため大学や他のギムナジウムから招かれた外部からの専門家が必ず入るのですが)の前に出てあがってしまう恐怖についてはいうまでもありませんが、その前の準備段階での大きな悩みの種は出題範囲がとても広いことでした。

例えばラテン語では、過去の授業で扱った古代ギリシャの哲学者の論述や、紀元前後に活躍した政治家や詩人(キケロ、セネカ、ウェルギリウス、ホラティウス、オウィディウスなど)の伝記と代表作について、何を問われてもよいように準備しておくはいいませんでした。またドイツ語においても出題範囲は広く、バロック時代から20世紀の現代文学に至るまでのドイツ文学史とその代表作11冊を読んで準備する必要がありました。

数学の口頭試験というのは、一体どんなものなのかときっと興味をもたれると思いますが、これは入室して、その場で口述される問題を即座に試験官の前で黒板に書きながら解いていくものでした。問題は十分たくさん用意しており、解ける人は時間のある限り何でもどんどん解いていってよいのです。途中、試験官からの質問も混じります。

数学以外の場合には自分の口頭試験の始まるきっかり15分前に呼ばれ、まず準備室に入り、そこでこれから受ける科目の文章資料を受け取って、少し準備することができます。フランス語の場合、試験の2か月ほど前にたくさんの課題図書リストの中から自分で3冊を選んで、その書名を届け出ておきます。ただし、この選択の際の条件は、1冊ずつが17世紀から20世紀までの間でそれぞれ異なった世紀に書かれた作品であることです。例を挙げると、18世紀からはヴォルテールの風刺小説「カンディッド」、20世紀からはカミュの「異邦人」、という具合です。そして3冊の本のいずれかから、抜粋が口頭試験に出題されます。15分の準備時間中にそれを読んで、それがどの本のどのような場面かを思

米川 恵子 / よねかわ・けいこ
1979年京都生まれ。
1993年よりスイス、Zürich(チューリッ)郊外のZumikon(ツミコン)市に在住。
2000年 Zürich州立Stadelhofen(シュタデルホーフェン)高校ラテン語科を卒業。

い出して解釈しておきます。続いて再び名前を呼ばれて、いよいよ試験官のいる部屋に入ります。入室すると、最初に生徒はその抜粋文を音読し、その際の発音の正確さや読みの流暢さ、果たして内容を把握して読んでいるのか、などが観察された上で評価されます。その後、その抜粋箇所をどのように解釈するかを問われましたが、もちろんその際フランス文学史の時代的背景をしっかりとみ込んでいることが肝要でした。更に、選んだ他の2冊の本との比較なども求められました。質問も答もフランス語のみで行われ、ドイツ語を使ってしまうと減点です。

私たち生徒は、どの口頭試験でも4年半の学習の成果を15分という短い時間内に反映させるために必死の思いでした。私の父はチューリッヒ大学で毎年医学生の実験の口頭試験の試験官をしていて、私とはまったく逆の立場にあります。父の話では、学生がよく勉強しているかどうかは口頭試験で「たちまちわかってしまう」のだそうです。また、よく勉強している学生が来ると、教師として大変嬉しいものだ、とも聞きました。こうしてドキドキした口頭試験が終了すると、2日後はもう合格発表でした。発表といっても名前が貼り出されるのではなく、不合格者にのみ学校から電話がかかることになっています。私たちのクラスには、在学中に成績不振で落伍して学校を去った人はいませんが、卒業試験までこぎつけた「生き残り組」22人には、嬉しいことに誰にも電話がかかってこなかったのです。

その日の夜は、担任の先生が全員を自宅に招待して下さり、先生の手作りのごちそうと生徒が作ったサラダやケーキを持ち寄って、みんなそろっての合格を祝いました。何よりのごちそうはみんなの笑顔と底抜けに明るいムードで、誰もが試験前のにしかかっていたあの重いプレッシャーをまったく忘れ、卒業後の予定を語り



合いながら楽しく過ごしました。クラスメートの卒業後の予定や進路はさまざまです。大学は10月から始まるので、それまでノルウェーの農家に住み込んで農作業を経験する予定の、大の自然愛好家で環境保護派の友人もいますし、イギリスまたはアメリカに語学留学をする人、またとりあえずは地元でアルバイトをして旅行費を稼ぐ人もいます。男子の場合は、スイスは国民皆兵制ですので卒業後間もなく初年兵学校に入学し、15週間の軍事訓練を受けるのが普通です。みんなジーンズを脱いで迷彩服に着替え、手にしていたペンを自動小銃に持ち替えることになります。

ここで卒業式当日について書きたいと思います。当日は、卒業生は早朝6時半に学校に集まり、卒業生による毎年の恒例行事、Maturstreich (卒業生のいたずら) の準備をしました。日本と比べると皆で団結して何かの共同行事をするのが大変少ないこちらのギムナジウムでは、この行事は皆がアイディアと力を出し合って行う数少ない行事の1つといえます。私たちの「いたずら」のテーマは「道化師」で、卒業生は全化粧や衣装をつけてピエロに変身しました。その日は、卒業生以外の学年は普通授業があったので、ピエロに化けた私たちは、次々と登校してくる下級生や先生の顔に、あらかじめ用意しておいたメイクアップ道具で落書きしたり、大胆にも職員室を占領して喫茶店にしたりしました。

そしてこの行事のクライマックスは午前10時半に、授業をしている最中のすべての生徒と先生を、卒業生が校内の広場に駆り出してきて始めました。その広場にはステージが用意されています。卒業生はこのステージに自分たちを受け持った各科目の先生を呼びだし、全生徒の前でとんでもないことを要求するのです。

例えば、私たちのラテン語の先生はファーストネームがJohannes (聖書に出てくるヨハネと同じ) というのもなるほど、とうなずけるのですが、牧師の息子で品行方正の真の紳士、いつも平静さを保ち、非の打ち所のないキャラクターなのです。もちろん生徒を怒鳴って叱ったことなどかつて一度もありません。生徒たちの間

で人望があるのはもちろんのこと、同じ先生仲間からもこの人柄故に信頼されています。それを何よりも如実に物語るのは、わが校に新任で来られた翌年に異例の若さでたちまち副校長に抜擢されたことでした。当時誰もがこの抜擢に驚きながらも、大きく納得したというエピソードがあります。そんな先生にステージに上がってもらってから卒業生が要求したのは、なんと「30秒間ノンストップで口汚くのしり続けること」でした。このアイディアは予想どおり、全校生をアツといわせ、その反響とどよめきで結局、肝心の先生の声がかき消されてしまい、残念ながらよく聞こえなかったというおまけ付きでした。

また校長先生も授業を持っておられ、数学を教えてもらっていたのですが、いつものしかめっ面の上に、ピエロのカツラと付け鼻で曲芸をしてもらいました。また何でも鋭く見抜いてしまわれるので決してごまかしのきかなかったスーパーインテリのドイツ語の女性の先生と英語の男性の先生には、「ロミオとジュリエット」のクライマックスの愛を語り合うシーンを熟演してもらったりして、日本の学校での先生と生徒の関係からはおそらく想像し難いようなシーンがくり広げられました。もちろん、校内が爆発の渦だったのは言うまでもありません。

こうして盛り上がったMaturstreichの行事が終わると、卒業生はひとまず家に帰って化粧などを落とし、夕方からの卒業式に向けての支度をしました。卒業式は学校のすぐ近くにある、あまり大きくないフランス教会で行われ、Maturを共に心から祝ってくれる両親は当然のこと、祖父母や兄弟姉妹など家族のメンバーの誰でも歓迎されたので、すぐに人であふれました。ちなみに、わが家では何か月も前から、この時間だけは父の予定を空けておいてもらうように頼み、卒業式に列席してもらう予定でしたが、あいにくこういう時に限って緊急の手術が入ってしまい、式には間に合いませんでした。母は来た時すでにたくさんの方があふれていて、もう席がなく最後まで立って見ていたそうです。

式は、まず生徒によるオーケストラの演奏で

厳かに始まりしました。その後、来賓である作家の祝辞に続いて、校長による卒業試験結果の発表と報告があり、それから一人ずつ名前が呼ばれて卒業成績証明書が手渡されました。これを手にした瞬間、これで本当にすべて終了したのだ、という実感が湧いてきました。全員に卒業成績証明書が渡された後は、それまでの荘重なクラシック音楽とは違って、プラスバンド部の演奏する晴れ晴れとした軽音楽の曲目に変わりました。やがて会場は新設成った講堂に移され、そこでの軽い立食パーティは、卒業生とその保護者が、お世話になった先生方や親しい友人と談笑する最後のチャンスを提供してくれました。全体として、スイスらしいとても質素で簡素な式であったことが良かったと思います。

Maturを終えた今、これまでの常に期限にせきたてられていた生活にひとまず区切りがついて、卒業できた安堵感と満足感を感じると同時に、この終わりは新たな始まりだと感じます。実社会に役立つ専門知識はこれから身に付けていかなければならないからです。在学中、特に成績の危機はなかったものの、たくさんの試験を乗り越えて、こうしてギムナジウムを終了できたのも、いつも私を温かく見守り、サポートしてくれた周囲のたくさんの方々のお陰です。私の両親、日本にいる家族、それから授業中に容赦のない厳しい質問攻めに悲鳴を上げつつも、いつもその高い知性と質の高い優れた指導力に感服させられてばかりだった私の恩師の先生方、青春の4年半を共に過ごした友人たち、に心から感謝します。